

第34回「ふるさと」と「コロナ」

「血につながるふるさと 心につながるふるさと 言葉につながるふるさと」。9歳で信州の馬籠を離れた島崎藤村はずっとのちに帰郷したとき、地元の小学校での講演でこう述べ、しばし絶句したという。故郷への思慕をあらわして、これほどいちずな物言いはない。

以上は、数年前の新聞記事からです。

私は、松崎中学校から下田北高校へ進学しました。当時はバスでは通えず、蓮台寺に下宿していました。高校1年というときはまだ子どもであり、初めて親元から離れ、ホームシックにかかってしまいました。中学のときは反抗期で親に文句ばかり言っていたのに、夜、下宿先に一人でいると父母が恋しく、無性に家へ帰りたくなりました。土曜日の授業が終わり、バスに乗って帰るときは心が躍ったものです。まさに「帰心矢の如し」でありました。私を待っていた父母も、同じ気持ちであったことでしょう。

コロナ禍で、体調不良などの場合は、お盆の帰省を見送るよう伝えてくださいと、非常に心が苦しくなりましたが、町から呼び掛けました。故郷を思う気持ちは私だけでなく、年に一度、お盆などに故郷へ帰りたいという気持ちの人は、昔も今も同じでしょう。肉親や友人との再会を分断させ、観光飲食業の収入を大幅にダウンさせた「コロナ」。

私はこのコロナに対し、国や県の方針・人類の英知を信じ、私たちがそれぞれの立場で今できることを愚直に実行していくことで、必ず未来は開けると信じています。